

法然の阿弥陀仏解釈―『逆修説法』と『阿弥陀経略記』との関連性―

齋藤蒙光

一. はじめに

浄土宗祖・法然房源空（一一三三―一二二二）は、人格仏としての阿弥陀仏の救済を愚直に信じるように説き、その仏格や仏身、相好などについてはあまり説明を加えない。ところが、法然が中原師秀の逆修法要の場で七日ごとに行った、全六回の説法の記録と伝えられる『逆修説法』においては、「仏の功德を讃歎する」名目により、各日の説法の前半に阿弥陀仏の功德の詳しい説明がなされている。ここでは『往生要集』や『阿弥陀白毫観』など、平安中期の天台浄土教者、恵心僧都源信（九四二―一〇一七）の著作が多く参照されていることが先行研究において指摘されている¹。本稿では源信の著作の中でも、特に『阿弥陀経略記』との関連性に注目したい。

二. 『逆修説法』三七日の「無量寿」の説明における『阿弥陀経略記』「弥陀の名義を明かす」文の引用

法然は『逆修説法』三七日の「仏徳讃歎」の説法において、阿弥陀仏の寿命の功德に言及する。そこでは、次のような記述が見られる。

次^ニ寿命ノ功德ハ者、諸仏ノ寿命随^テ意^ニ有^リ長短^一。依^レ之^ニ恵心僧都、作^下ヘリ四句^ヲ、或^ハ有^リ仏ノ寿命ハ長^ク、所化ノ衆生ハ

命短。如花光如来、仏、命、十二小劫、衆生ノ命、八小劫也。或有能化ノ仏、命短ク、所化ノ衆生、命長キ。如二月面如来、仏ノ命、一日一夜、衆生ノ命、五十歳也。或有能化所化俱、命短キ。如三釈迦如来、仏、衆生俱、八十歳也。或有能化所化俱、命長。如阿弥陀如来、仏、衆生俱、無量歳ナリ也。…但シ、若シ神通ノ之大菩薩等、計ハ給ハラニハ一、大恒沙劫也。以ニ『大論』ノ意、恵心、勘下レリ之。此ノ数、非ニ二乗・凡夫ノ所レ可ニ数ヘ知ル。故ニ云、無量也。法然は、諸の浄土における仏・衆生の寿命の長短に関する四句分別と、阿弥陀仏の寿命の具体的な年数について、源信の解釈を踏襲している。それらの出典は『阿弥陀経略記』の次の段落に見出せる。

「舍利弗、於汝意云何。彼仏何故号阿弥陀。舍利弗、彼仏光明無量、照十方国無所障碍。是故号为阿弥陀。又舍利弗、彼仏寿命及其人民、無量無辺阿僧祇劫。故名阿弥陀。舍利弗、阿弥陀仏成仏已来於今十劫。」

経曰「舍利」至「十劫」者、第二ニ明ス弥陀名義。過ヲ於無量ノ天人聖衆所居宮殿林池樓閣莊嚴境界、而入ニテ内宮ニ得レ見ル如来。国非ニ莊麗、無シ以テ重スル威ヲ。故ニ明ニス宝土ニ後ニ説ニ仏徳。有ニ自問自答、如レ文可レ知。

一切ノ諸仏ニ総ニ有ニ二身。一ニ者眞身、住ニス報仏ノ土ニ。二ニ者応身、住ニス同居土ニ。西方ノ化主ハ是レ一応化也。故彼ノ名号亦随レレ心ニ立ツ。

於阿弥陀ノ一ノ梵語ノ中ニ含ニス無量光・無量寿ノ義。無量光トハ、如レ文。『称讚経』ニ云、「彼如来、恒ニ放無量無辺妙光、偏ク、照ス一切ノ十方仏ノ土ヲ。施作仏事、無レ有ル障碍。『観経』ニ云ク、「彼ノ仏ニ有ニ八万四千ノ相。一ノ相ニ有ニ八万四千随形好。一一ノ好ニ有ニ八万四千光明。一一ノ光明、偏ク照ス十方世界、念仏衆生ヲ撰取、不レ捨テ。光明相好及与レ化仏、不レ可ニ具ニ説ク」云。総ソ計レハ之ヲ、一相ノ中ニ具ニス七百五俱胝六百万光明。正使和シシ億千日月、其光熾燃、不レ可レ得レ比。八万四千ノ相、一一亦如レ是。無量寿者、亦タ如レ文。『称讚』ニ云ク、「彼如来及諸ノ有情、寿命無量無數大劫也。『大論』ニ曰ク「無量億阿僧祇ト与ニ恒河ノ者多数也、理同シ」云。諸文雖レ異也ト、

彼土ノ寿命、大都一恒河沙数劫ナルミ耳。

此之二義、顯横豎ノ益ヲ。無量光ト者、顯横ノ利物ヲ、偏照ニ十方ヲ、撰衆生ニ故。無量壽ト者、顯ニ豎ノ利物ヲ。經ニ無量劫、利スル衆生ニ故ニ。二利常ニ円也、故ニ得ニ此名ヲ。常光一尋ハ、雖レ常也ト非レ偏。別縁偏照ハ、雖レ偏ト非レ常ニ。此ハ光明ハ、即不レ如是。經ニ無量劫、偏照ニ十方ヲ。問。仏ト与ニ衆生ニ壽同シ。光明、何カ故ニ不レ爾。答。若威光劣ナラハ、尊重不レ深。壽命ハ、設シ短ナラハ、還テ生ニ戀慕。故ニ凡ソ諸仏壽、隨宜ニ不同也。或有ニ仏ハ長ク衆生ハ短キ、如シ未來花光仏世。或有ニ仏ハ短ク衆生長キ、如東方月面如來ノ、彼仏壽命一日一夜也。或有ニ俱ニ長キ、如ニ極樂國。或有ニ俱ニ短キ、如ニ今ノ仏世。

若シ作ニ觀解、無ハ者即空、量ト者即假、壽ト者即中。仏者三智即一心ニ具ス。應レ知ル、円融三觀之智、冥ニ於円融三諦之境ニ、万徳自然ニ円ナルヲ、名ニ阿弥陀仏ト。衆生、無始ヨリ從レ因生レ果ニ。具ニ有ニ六即ノ阿弥陀仏。至レ下當知。問。何カ故ニ不レ説ニ仏ノ余ノ功德ヲ。解。曰ク、諸ノ正教ノ中ニ明ニ三世ノ仏、但説ニ化用ノ差別。不レ説ニ内証ノ功德。即由下内徳ハ諸仏無異、利生方便ハ諸仏不同也。菩薩ハ不レ爾。隨レ位徳別ノ故ニ、隨ニ其人ノ説ニ内外ノ徳ヲ。

この一段は、『阿弥陀經』において「阿弥陀の名義」として光明無量・壽命無量の二義が挙げられる部分についての解説であり、その寿命の解釈に当たる傍線部が、『逆修說法』三七日に受用されている。このこと自体は、先行研究において既に指摘されているのだが、その前後の文に目を向けると、他にも『逆修說法』の仏徳讚歎と相似する記述が多く存在する。以下に紹介していこう。

三・眞假二身の仏身論

『阿弥陀經略記』の「弥陀の名義を明かす」段においては、まず仏身論が記される。

法然の阿弥陀仏解釈―『逆修說法』と『阿弥陀經略記』との関連性―

法然は、「阿弥陀仏の内証・外用の功德、無量なりと雖も、要を取るに名号に如かず」と述べて¹¹、源信と同じく「阿弥陀」の名義である光明と寿命に注目する。前述のように、その寿命を「一恒河数劫」と計算する『阿弥陀経略記』の説を紹介するのが、そのみならず、法然は無量光についても次のように説明している。

先¹²明¹³光明¹⁴功德¹⁵者、初¹⁶無量光¹⁷者、經¹⁸云、無量寿¹⁹仏、有八万四千相、一々相各有八万四千随形好、復有八万四千光明、一々光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨²⁰云。恵心、勸²¹之云、一々ノ相ノ中²²、各具²³七百五俱胝六百万ノ光²⁴明²⁵。熾燃赫奕²⁶ヲリト云。從²⁷一相²⁸所²⁹出³⁰ノ光明³¹、如³²斯³³ノ。況³⁴ヤ八万四千ノ相³⁵乎。誠³⁶ニ非³⁷算数³⁸ノ所³⁹ニ及⁴⁰。故⁴¹ニ云⁴²ニ無量光⁴³ト⁴⁴。

一相より放たれる光の総量についても、やはり源信が「七百五俱胝六百万」と計算していることを紹介している。そこで直接的に引用されているのは『往生要集』の文¹³だが、続く「一相より出だす所の光明、斯の如し。況や、八万四千の相をや」という法然の言葉は、『阿弥陀経略記』のみに記される「八万四千の相も、一一亦、是の如し」という一文をも連想させる。

五、横豎の益

『阿弥陀経略記』の「弥陀の名義を明かす」段では、さらに光明・寿命の説明が続く。

此¹之²二³義⁴ハ、頭⁵ニ横⁶豎⁷ノ益⁸ヲ。無量光⁹ト者、頭¹⁰ニ横¹¹ノ利物¹²ヲ。偏¹³照¹⁴ニ十方¹⁵ヲ、攝¹⁶ニ衆生¹⁷ヲ故¹⁸。無量寿¹⁹ト者、頭²⁰ニ豎²¹ノ利物²²ヲ。經²³ニ無数劫²⁴ヲ、利²⁵ニル衆生²⁶ヲ故²⁷。二²⁸利²⁹常³⁰ニ円³¹也、故³²ニ得³³ニ此³⁴名³⁵。常光³⁶一尋³⁷ハ、雖³⁸レ常³⁹也ト非⁴⁰レ偏⁴¹。別縁⁴²偏照⁴³ハ、雖⁴⁴レ偏⁴⁵ト非⁴⁶レ常⁴⁷也。此⁴⁸ノ光明⁴⁹ハ、即⁵⁰不⁵¹レ如⁵²レ是⁵³。經⁵⁴ニ無量劫⁵⁵、偏⁵⁶照⁵⁷ニ十方⁵⁸ヲ。問⁵⁹。仏ト与⁶⁰ニ衆生⁶¹ニ寿同⁶²シ。光明⁶³、何⁶⁴ガ故⁶⁵ニ不⁶⁶レ爾⁶⁷ヲ。答⁶⁸。若威光⁶⁹劣⁷⁰ナラハ、尊⁷¹重⁷²不⁷³レ深⁷⁴。寿⁷⁵命⁷⁶設⁷⁷短⁷⁸ナラハ、還⁷⁹テ生⁸⁰ニ恋慕⁸¹一⁸²ヲ。故⁸³ニ凡⁸⁴諸⁸⁵仏⁸⁶寿⁸⁷、隨⁸⁸レ宜⁸⁹ニ不同⁹⁰也。或⁹¹有⁹²ニ仏⁹³長⁹⁴衆生⁹⁵短⁹⁶キ、如⁹⁷ニ未⁹⁸

来花光仏世^一。或^ハ有^二仏^ハ短^ク衆生長^キ、如^二東方月面如来^一、彼仏寿命一日一夜也。或^ハ有^二俱^ニ長^キ、如^二極楽国^一。或^ハ有^二俱^ニ短^キ、如^二今^ノ仏世^一。

源信は、光明は横へと広がって十方世界の衆生を摂取し、寿命は豎に延びて無数劫の衆生を摂取すると述べる。光明については、「常光一尋」と「別縁偏照」という二種の光明を対比し、前者は常に照らす但十方には行き渡らず、後者は十方に行き渡るが常に照らす訳ではないという。それに対し、阿弥陀仏の光明は無数劫に渡って十方世界を照らすと解釈している。また、寿命については、種々の仏土における仏・衆生の四句分別を記し、阿弥陀仏と極楽の衆生の寿命がともに長いことを強調する。

『逆修說法』では「横豎の益」に対する直接的な言及は見られないが、前に引用したように、三七日の冒頭において「彼の阿弥陀仏の一切徳の中には、寿命を本と為し、光明勝れたるが故也¹⁴」と説かれている。すなわち、光明は十方に行き渡ることが見て取れるために、目には見えない他の功徳よりも勝れており、寿命が長くことで他の功徳も維持できるのだから、寿命こそが根本なのだという。光明が空間的に、そして寿命が時間的に行き渡るといふ見解は、三七日の仏徳讚歎の説法の全体に見て取れる¹⁵。

そして寿命に関しては、前述のように『阿弥陀経略記』の四句分別の取意文が記されている。そのみならず、光明についても、『無量寿経』所説の「十二光」を取り上げた¹⁶後に、改めて二種の光明が挙げられる。

大方^タ彼^ノ仏^ノ光明^ノ功徳^ノ中^ニハ、備^ニ有^リ如^ク是^ノ義^ヲ。細^カカ^ニ明^ハ者[、]可^レ有^ニ多^ク種[。]大^ニ分^テ有^リ二[。]謂^ク、一^ニハ常光、二^ニハ神通光^{ナリ}也¹⁷。

法然も、仏の光明を「常光」「神通光」という二種の光に分類しており、表現は異なるが『阿弥陀経略記』とほぼ同内容の分類が用いられている。法然は、その「常光」に関しては、『往生要集』を参照して、『平等覚経』所説の「頭光」と、

『観経』所説の「身光」という二説があることを述べ、神通光に関しては『法華経』などの描写¹⁸と『観経』の「光明遍照：撰取不捨」の文とを結びつけて解釈する。比較すると『阿弥陀経略記』は、後述するが、光明を観じることに大きな意味を持たせていることもあつてか、「無量光」を常光・神通光のいずれでもない特殊な光と解釈しているのに対し、法然は、阿弥陀仏も釈迦仏などと同様に、常光・神通光のいずれをも具えていると解釈している。

六・名号に対する再解釈

『阿弥陀経略記』の件の文において源信は、光明・寿命の説明を終えた後、『阿弥陀経』の密意として¹⁹改めて名号を解釈する。

若^レ作^ニサハ観解^ヲ、無^ハ者即空、量^トハ者即仮、寿^ト者即中。仏者三智即^チ一心^ニ具^ス。應^レ知^ル、円融三観之智、冥^ク於^レ円融三諦之境^ニ、万徳自然^ニ円^{ナル}ヲ、名^ニ阿弥陀仏^ト。衆生、無始^{ヨリ}從^レ因生^{レル}果^ニ。具^ニ有^リ六^即阿弥陀仏。至^レ下^当知^ク。問。何^カ故^ニ不^レ説^ニ仏^ノ余^ノ功德^ヲ。解^ソ曰^ク、諸^ニ正教^ノ中^ニ明^ク三世^ノ仏^ヲ、但^ニ説^ク化用^ノ差別^ヲ。不^レ説^ク内証^ノ功德^ヲ。即^チ由^ル内徳^ノ諸^ハ仏無^レ異、利生方便^ハ諸^ハ仏不同^ニ。菩薩^ハ不^レ尔^ヲ。随^レ位徳別^ノ故^ニ、随^ニ其人^ニ説^ク内外^ノ徳^ヲ。

この、「無量寿」の三字にそれぞれ空・仮・中を配当する『阿弥陀経略記』の記述こそが、いわゆる「阿弥陀三諦説」「無量寿三諦説」の源泉と位置付けられている²⁰が、ここで源信は「無量寿」の三字のみならず「仏」の一字をも取り上げて「三智即ち一心に具す」と述べる²¹。「円融三観の智」すなわち「仏」が、「円融三諦の境」すなわち「無量寿」と冥合し、万徳が自ずと円満するから「阿弥陀仏」なのだというのである。その上で源信は、なぜ『阿弥陀経』は光明・寿命について説くのみで、他の功德に言及しないのかと自ら問いを立てる。そして、「諸の正教の中に三世の仏を明かして、但、化用の差別を説く。内証の功德を説かず。即ち内徳は諸仏に異なり無く、利生の方便は諸仏不同に由る」と答え、

省略されただけで実際には名号の内に内証の功德も含まれるのだと主張する。

ところで、源信は右の名号解釈において、衆生が「六即の阿弥陀仏」を具えるという因から果が生じるのだと述べている。それに関して、『阿弥陀経』の半ば、衆生の修因を示す「舍利弗、若有善男子善女人、聞説阿弥陀仏、執持名号、若一日…若七日、一心不乱²²⁾」の文に対する解釈において説明されている。

二、顯正因。舍利下至一心不乱是也。意云、若一日二日乃至若七日、面向西方、觀下仏威光、偏照十方、無所障碍。称名一心、念願生彼国土、淨信無疑。応如是修。…若欲修深觀、見「止觀」ノ常行三昧ノ文。或觀無縁ノ慈、是即深觀惠。…意云、無^ト者法ノ空、即所縁ノ理也。理性即^チ是^レ法身ノ菩提^{ナルカ}故也。『大般若経』ニ云ク、「一切法ノ空ヲ説^テ為^ニ法界^ト。即此^レ法界ノ説^テ為^ニ菩提^ト」云。縁^ト者能縁、即是般若也。般若^ハ即是^レ報身ノ菩提也。慈悲利生^ハ即是^レ解脱也。解脱即是^レ応身菩提也。由^レ此^ニ当^ニ知^ル。無縁ノ慈悲、是^レ即^チ諸仏三身万徳也。故『大般若』ニ云ク、「諸仏如来、所有^ニ功德、大悲・般若ノ二法ヲ為^レ性^ト。離^ニ分別想^ト、無^ニ功用^ト。利^ニ樂^ノ有情^ト、無^ニ時^ト暫捨^ル。」^上 雖^レ言^フ二法^ト即具^ニ三徳^ト。智及智処^ヲ為^ニ般若^ト、故「離分別」ノ言、兼^テ顯^ス法身^ヲ。無^ニ分別^ト、一切法常住^{ナリ}。乃至補処、所有^ニ徳、皆是^レ如来功德ノ一分也。應^レ知。十方三世ノ仏衆法界^ハ、不^レ出^ニ無縁ノ慈悲ノ光外^ト。此中^ニ法身、偏^ニ自他ノ身^ト、凝然常住^ノ法界ノ性^ト故^ニ、般若解脱、雖^レ無^ニ時^ト事用^ト、無^ニ始時^ト来^テ理性常然也。行人、応^ニ念願^ス。由^ニ無縁ノ慈光明^ニ所^レ照^サ故^ニ、得^レ顯^ニ自他ノ身本三身ノ性^ト。…但、行住坐臥^ニ、繫念^ニ彼国、觀^ニ仏^ヲ以^テ無縁慈威光照^ニ十方、称名^ニ一心念深信願^シ生彼^ト。是^レ為^ニ往生極樂綱要^ト。

源信は『阿弥陀経』所説の「執持名号、若一日…一心不乱」を「正因」の行と位置付けるが、称名と共に「仏の威光、偏く十方を照らし、障碍する所無きことを観ず」るようにも勧める。さらに、もし密意として深觀を修するならば、その光明を放つ源である「無縁の慈悲」を觀じよと勧める。「無」は所縁の理、すなわち法身の菩提であり、「縁」は能縁

の般若すなわち報身の菩提であり、「慈悲利生」は解脱すなわち応身の菩提なのだから、そこに「諸仏の三身万徳」が集約されるといふ。また『大般若波羅多經²⁴』を引用し、「般若」すなわち法身と報身、そして「大悲」すなわち応身の三徳は分別を離れており、分別を離れたならば一切法常住なのだから、一生補処の菩薩の全ての功徳から十方三世の仏衆法界に至るまで、すべてが「無縁の慈悲の光」の内に含まれるのだと論じる。さらに、三身の中でも法身すなわち「理性」は、般若・解脱のいまだ顕現しない無始の昔より、自他の身中にあり続けるのだから、慈悲の光明に照らされた行者の内には、自他や三身の性が顕れてくるのだと論じる。

これらの解釈に続き、源信は『阿弥陀經』における衆生の感果、すなわち「其人臨命終時、阿弥陀与諸聖衆、現在其前：即得往生阿弥陀仏極楽国土²⁵」の文についても解釈する。そこで源信は、なぜ観心を行わずに専ら仏相を念じるのみで感応を得るのかと問いを立て、次のように答える。

答。豈不^ニ前^ニ説^カ。由^ル願^レ信^解、観^レ念^見仏^ヲ。…念^ハ仏^ハ是^レ行^也、故^亦得^レ見^ル。何^ニ況^{シヤ}身^後生^ニ彼^ノ国^土。設^ヒ有^{ランモ}優^劣、何^ソ言^{フヤ}無^レ分^{。然}。今^亦順^レ彼^{。前}。因^ニ無^レ縁^ノ慈^{、略}示^ニ本^有ノ性^{。今}重^テ依^テ教^文ニ、当^レ助^ニ念^ハ仏^ノ行^ヲ。…当^ニ知^ル。彼^ハ仏^ノ依^正ノ万^徳、無^始ヨリ已^来、在^ニ己^心中^ニ。妄^想遮^ヘ眼^ヲ、雖^モ未^ダ能^レ見^ル、法^性常^円ニ、実^ニ無^レ増^減。若^シ未^ダ得^レ聞^{、是}①理^即ノ万^徳也。聽^聞信^解スルハ、是^レ②名^字ノ万^徳。一^心称^念、是^レ③觀^行ノ万^徳也。蓮^台託^生ノ後^ハ、当^ニ④相^似万^徳ニ。百^法明^門ノ後^ハ、即^チ⑤分^真ノ万^徳也。乃^至⑥究^竟。如^ク理^ノ心^ヲ思^フ。三^界唯^心也。心^ノ外^ニ無^シ別^法。己^心既^円ナレハ、諸^法亦^亦尔^也。²⁶

源信は、観念のみでも見仏を得て往生することが叶うと述べつつも、観心の方が勝れていることを認める。その上で、前の「無縁の慈悲」釈を踏まえて「彼仏の依正の万徳は、無始より已来、己心の中に在り」と述べ、妄想に遮られてそれを聞いたことすらない者の中にも「理即の万徳」として具わっているという。そこから、名号を聴聞信解して一心に

觀稱し、さらに往生を遂げて数多の法門を修学するにつれて、段階的に「六即の万徳」が顕れていくのだと論じる。

このように、『阿弥陀経略記』は「非^三全^ク遮^{スルニハ}彼^ノ但^{信ノ}称念^ヲ」と述べつつも、經の密意として名号を「無量寿三諦説」によつて解釈しており、称名と共に「無縁の慈悲の光明」を觀じることが勧められている。ここでは、阿弥陀一仏の功徳が諸仏の三身万徳へと拡大解釈され、三身の中でも根源的な法身が重要視されている。そして、阿弥陀仏の依正の万徳が己心にも具わっているからこそ、衆生の見仏や往生などが叶うのだと解釈している。

一方、『逆修説法』四七日の冒頭には、次のように記されている。

仏^ニ有^マス^ニ惣^{トハ}別^{トハ}二^ノ功徳^{ナリ}。先^ツ惣^{トハ}四^ノ智[・]三^ノ身^{等ノ}功徳^{ナリ}也。一切^ノ諸^{佛ハ}内^{証等ク}具^ツ、一^ノ仏^モ無^レ異^{ナリ}。故^ニ、諸^{經ノ}中^ニ説^ニ仏^ノ功徳^ヲ、惣^ト不^レ説^ニ内^{証ノ}功徳^ヲハ、唯^{別ノ}説^ク外^{用ノ}功徳^ヲ也。雖^レ尔^ト、為^ニ善^{根成就ノ}、三^ノ身^ノ功徳[、]如^レ形^ノ可^レ奉^ル説^キ也²⁸。

法然は、「総」の功徳に「円融三智」ではなく「四智」を挙げてはいるが、『阿弥陀経略記』と同じく、諸經において内証の功徳が省略されていることを述べる。その上で、「尔りと雖も、善根成就の為に、三身の功徳、形の如く説き奉るべし」と断り、内証の三身について説明を行う。

先^ツ法^{身トハ}者[、]是^レ無^レ相^{甚深ノ}理^{ナリ}也。一切^ノ諸^{法、}畢竟^{空寂ナル}即^{名ニ}法^{身ト}。次^ニ報^{身トハ}非^ニ別^{物ニ}、解^リ知^ル彼^ノ無^レ相^ノ之^妙理^ヲ智^恵名^ニ報^{身ト}也。所^知名^ニ法^{身ト}、能^知名^ニ報^{身ト}也。此^ノ法^{報ノ}之^{功徳、}周^ニ遍^{セリ}法^{界ニ}。無^レ不^レ周^ニ遍^{菩薩ニ乗ノ}之上^ハ乃至^ニ六^趣四^{生ノ}上^ニ。次^ニ心^{身トハ}者[、]為^レ濟^ニ度^{カサ}衆^{生ヲ}、於^ニ無^{際限ノ}中^ニ示^シ際^{限ヲ}、於^ニ無^功用^ノ中^ニ現^シ功^{用ヲ}給^{ヘル}也²⁹。

法然は、法身とは「無相甚深の理」であり、報身に対して「所知」なのだという。また、報身とはその無相の妙理を解

り知る「能知」であり、法身・報身は別物ではないと論じる。この「能」「所」という表現は、『阿弥陀経略記』の「無縁の慈悲」釈を踏まえてのものと推測される³⁰。「能縁」「所縁」ではなく「能知」「所知」としたのは、『阿弥陀経略記』が『大般若経』の「諸仏如来の所有功德、大悲・般若の二法を性と為す。分別想を離れ、功用無し。」という引文について、「二法と言ふと雖も、即ち三徳を具す。智及び智処、般若を為す。」と解釈していることに由つたのであろう。また、法然が応身について「衆生を済度せんがために、無際限の中に於て際限を示し、無功用の中に於て功用を現じ給えるなり」と述べるのは、『大般若経』の引文において「般若」すなわち法・報二身と同列に記されていた、「大悲」すなわち応身の位置付けを下げ、「分別想を離れ、功用無し」という表現を反転させているのであろう。このように、『逆修説法』における三身の説明は『阿弥陀経略記』に基づいているが、その一方で法然は、「此の法報の功德、法界に周遍せり。菩薩・二乗の上、乃至、六趣・四生の上にも周遍せずと云ふこと無し」と、法身のみならず報身の功德が法界に遍満していることを強調する³¹。彼土のみならず此土までも阿弥陀仏の影響下に置くこの説示³²は、一見すると法然の基本的な仏土解釈と反するようにも思われるが、法身を重視する『阿弥陀経略記』の「無縁の慈悲」釈と比較したならば、人格的な報身のはたらきがより強調されていることが理解できる³³。

さて、名号解釈に話題を戻すと、『阿弥陀経略記』では、「阿弥陀」の三字のみならず「仏」の一字にも注目していた。そこで『逆修説法』六七日の冒頭を見ると、次のように記される。

名号ノ功德ハ、一切ノ諸仏ニ皆、有ニ二種ノ名号。謂フ通号ト、別号ト也。∴阿弥陀仏ニモ有ニ二通号別号。阿弥陀トハ、者別号也。此ニ云ニ無量寿無量光ト。此ノ別号ノ功德ハ、前々ニ奉レ尺候。通号トハ、者云レフ仏ト是ナリ也。一切ノ諸仏、皆、具ニ下ヘリ此ノ名ヲ。一仏モ無レ替。一仏トハ、者具ニ云ニ仏陀ト³⁴。

法然は別号の「阿弥陀」が「無量寿」「無量光」を意味することを再度確認した上で、通号の「仏」に注目する。その説

明の中で、次のように述べられている。

『往生要集』ノ対治懈怠ノ中ニ、挙タリ二十種ノ仏ノ功德ヲ第二ニ、讚ルニ名号ノ功德一ヲ、引ニ『維摩經』ニ云ク、「諸仏ノ色身・威相・種姓・戒・定・智慧・解脱知見・力・無所畏・不共之法・大慈大悲・威儀所行、及其壽命・説法・教化・成就衆生・淨土仏国土、具諸仏法、悉皆同等ナリ也。是ノ故ニ名ヲ為ス三藐三仏、名ヲ為ス多陀阿伽度、名ヲ為ス仏陀。」又、『西方要決』ニ云、「諸仏願行、成此果名、但能念号、具包衆徳、故成大善」^上。是レ通号ノ功德、成ス大善也。然レ永観律師ノ『十因』ニ、尺ニスル阿弥陀ノ三字ヲ之処ニ引ニ此文ヲ、尺ニ成セラレタルハ別号ノ功德ノ大善ナル様ヲ者僻事也。申ニ南無阿弥陀仏ト功德殊勝ナル者、通号ノ之仏ト云フ一字ノ故也。云フ阿弥陀ト之名号ノ目出貴キモ、彼ノ仏ノ之名号ナルカナリ也。然レ阿弥陀ノ三字ヲ付ケ名ニ給ヘル故ニ、功德殊勝ナル仏ニテ坐マヌ様ニ申ヌ人モ候。其レハ僻事ニテ候也³⁵。

法然は『往生要集』より、様々な功德がみな同等であるから「三藐三仏」「多陀阿伽度」そして「仏陀」と呼称するのだと述べる文を引用する。また『西方要決』を引用して³⁶、名号の功德が殊勝であるのも、願行を成就したことを表す「仏」の一字のためだと主張し、「阿弥陀」の三字の解釈にこの文を用いる永観の『往生拾因』について「別号の大善なる様を成せられたるは僻事なり」と批判する³⁷。続けて「然るに阿弥陀の三字を名に付き給へる故に、功德殊勝なる仏にて坐ます様に申す人も候。其れは僻事にて候也」と同内容の批判を繰り返すことから、ここで法然は永観以外の「阿弥陀三諦説」についても意識しているものと思われる³⁸。

以上のように、「逆修説法」の「仏徳讚歎」の説法と『阿弥陀経略記』の「弥陀の名義を明かす」一段との間には、相似する点が多く見出せる。法然は『阿弥陀経略記』と論理的枠組みを共有しながら、これらの説法を構築している可能性が高い。解釈の異なる話題についても、法然は源信を名指して批判することはせず、『往生要集』を初めとする源信の他の著作より自説と合致する表現を抽出して会通を図っている。

七. まとめ

法然は、『逆修説法』三七日の仏徳讃歎の説法において阿弥陀仏の寿命を説明する際に、源信の『阿弥陀経略記』の「弥陀の名義を明かす」一段の解釈を援用している。その一段において源信は、阿弥陀仏の仏身の説明に二身論を用い、「阿弥陀」すなわち無量光・無量寿の総量を計算する。また、阿弥陀仏の光明を「常光一尋」と「別縁偏照」という二種の光と比較し、寿命について諸仏・衆生の四句分別を説く。その後、再び経の密意として「無量寿三諦説」を説くが、その際に円融三智を一心に具えるのが「仏」なのだと述べ、諸仏の内証は共通するために『阿弥陀経』では説明が省略されるのだと論じる。

一方、法然の『逆修説法』仏徳讃歎の説法を見ると、一七日の冒頭でやはり二身論をもって仏身の説明をしている。三七日では「阿弥陀」の別号すなわち光明・寿命の功德を取り上げるが、一相から放たれる光明の量について源信の計算を引用し、常光・神通光という二種の光に言及する。寿命については、『阿弥陀経略記』より寿量の計算や四句分別を援用する。四七日では、諸仏の内証は説明を省略されるのが一般的だと断りつつも、内証に分類される三身について、『阿弥陀経略記』の「無縁の慈悲」解釈を援用しつつ説明をする。そして六七日では、通号の「仏」の一字に注目する。このように、『阿弥陀経略記』の件の一段と『逆修説法』仏徳讃歎の構成には共通点が多い。法然がこの一段に目を通していることは確実であり、その論理的枠組みを共有しながら『逆修説法』における仏徳讃歎の説法を構築した可能性が高い。

ただし、各話題に関する両書の記述内容を比較すると相違点も見られる。『阿弥陀経略記』は、経の「顕意」の説明において極楽浄土に住まう阿弥陀仏を応化身と位置付ける一方で、その光明については釈迦仏などが放つ二種の光とは異

なるものとして解釈している。さらに、経の「密意」の説明において「無量寿三諦説」を説き、称名のみならず「無縁の慈悲の光」を観じることを勧める。その光には阿弥陀一仏のみならず諸仏の三身万徳までもが含まれると拡大解釈し、三身の中でも法身を重要視している。

それに対して法然は、真身と化身、常光と神通光のいずれをも具えているのが阿弥陀仏だと説明している。また、三身の説明においても、人格仏である報身のはたらきを強調する。そして六七日においても、「阿弥陀」の別号よりも、願行を成就した人格身であることを示す「仏」の通号を重視すべきだと主張している。

このように、「阿弥陀経略記」と比較することで、『逆修説法』仏徳讚歎における法然の意図や独自性を、より明確に読み取ることができる。

〈参考文献〉

- 香月乗光「法然教学に於ける称名勝行説の成立」(『仏教文化研究』第四号、一九五四)
- 末木文美士「阿弥陀三諦説をめぐって」(『印仏研』第五五号、一九七九)
- 福原隆善『逆修説法と『往生要集』』(『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇』、同朋舎、一九八八)
- 和田典善「源信と法然における光明について」(『仏教文化学会紀要』第一一号、二〇〇二)
- 村上明也「源信における「無量寿三諦説」成立の再考」(『仏教学研究』第六四号、二〇〇八)
- 曾和義宏「法然上人の阿弥陀仏論―その説示に注目して―」(『浄土宗学研究』第三七号、二〇一〇)
- 曾根宣雄『逆修説法』四七日の三身論についての再検討」(『大正大学研究紀要』第九六号、二〇一一)

齋藤蒙光「法然上人の『往生要集』観―『選択集』第三・四章を中心に―」

〔藤本浄彦先生古希記念 法然仏教の諸相〕、法蔵館、二〇一四

安孫子稔章「『逆修説法』における源信の影響について」〔仏教文化学会紀要〕第二五号、二〇一六

曾根宣雄「『逆修説法』四七日の三身論と『阿弥陀経略記』の三身論について」〔仏教論叢〕第六一号、二〇一七

齋藤蒙光「法然と永観浄土教」〔東海仏教〕第六二号、二〇一七

- 1 福原論文、安孫子論文、曾根論文（二〇一七）参照。特に曾根論文では、「逆修説法」三七日の三身論が『阿弥陀経略記』の影響下にあることが指摘されている。
- 2 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一九三～四頁。
- 3 『浄土宗全書』（以下『浄全』と略す）一・五三頁。
- 4 『恵心僧都全集』一・三九九～四〇一頁。
- 5 『阿弥陀経略記』の冒頭には、「初大意者、弥陀本地応迹難量。普偏十方、広利六道。極楽、是其一区、弥陀、是其一化也。」（『恵心僧都全集』一・三八二頁）と記される。
- 6 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一四一頁。
- 7 一身から十身までを列記するのは、浄影寺慧遠『大乘義章』に依拠することが、曾和論文において指摘されている。
- 8 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一四一～二頁。

9 『大智度論』卷八二に次のように記される。

問仏、「是菩薩発心已来、為幾時能得如是方便。」仏答、「是菩薩発心已来、除大菩薩、於余衆生無量億阿僧祇劫。或有菩薩発心已来無量億阿僧祇劫。大罪因縁覆心故不見仏、不親近供養。」是故問、「是菩薩為供養幾仏。」仏答、「是菩薩為已供養如恒河沙等諸仏。」上言「無量億阿僧祇」今言「恒河沙」者、多数、理同故。

〔大正藏〕二五・六三五頁c。

10 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一八三頁。

11 この表現も、後述する『阿弥陀経略記』の「諸の正教の中に三世の仏を明かして、但、化用の差別を説く。内証の功徳を説かず。即ち内徳は諸仏に異なり無く、利生の方便は諸仏不同に由る」という文を意識している可能性がある。

12 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一八三〜四頁。

13 『往生要集』第四大文「正修念仏」において、觀察門の雑略観について「当_レ知_ル、一一ノ相_ノ中_ニ、各具_シ七百五俱胝六百万ノ光明_ヲ、熾然赫奕_{トシ}、神徳巍巍_{タル}」如_シ在_ニル金山王ノ大海_ノ中_ニ〔『浄全』一五・八四頁上〕と記される。

14 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一八三頁。

15 和文体の法然遺文「三部経釈」には、「惣じては、光明無量の願は、横に一切衆生をひろく攝取せんがためなり。寿命無量の願は、豎に十方世界をひさしく利益せんがためなり。」（龍谷大学仏教文化研究所『龍谷大学善本叢書一五 黒谷上人語燈録（和語）』同朋舎、一九九六、五六〇頁）という記述が見られる。

16 和田論文において、『逆修説法』の十二光解釈と『往生要集』との関連性が論じられている。

17 『黒谷上人語燈録写本集成』一・一八七頁。

18 『逆修説法』には「神通_{トハ}光者是_レ別時_ニ照_ス光也。如_ド釈迦如来_ノ欲_レ説_ニ法華経_一之時_キ、照_シ東方_ノ万八千土_ノ者、

則神通光^{ナリ}也。阿弥陀仏ノ神通光^ハ者、撰取不捨ノ光明^{ナリ}也（『黒谷上人語燈録写本集成』一・一八八頁）と記される。出典として挙げられる『妙法蓮華経』卷一には「尔時、仏、放眉間白毫相光、照東方万八千世界。靡不周遍、下至阿鼻地獄、上至阿迦尼吒天。」（『大正蔵』九・二頁b）とある。また『大智度論』には、次のように記される。

菩薩、從兜率天上、欲降神母胎。尔時、身放光明、遍照一切世界及世間幽冥之处。次後生時、光明遍照、亦復如是。初成道時、轉法輪時、般涅槃時、放大光明、皆亦如是。及於余時、現大神通、放大光明。如欲說般若波羅蜜時、現大神通、以大光明、遍照世間幽冥之处。如是比、处处經中說神通光明。（『大正蔵』二五・三〇八頁c）

19 村上論文において「観解」や「深観」は、『阿弥陀経』の密意を指し示す語句だと論じられている。『阿弥陀経』の顕意と密意については、『阿弥陀経略記』の冒頭に次のように記されている。

然^ニ此経者、其取^レ顕也。則息^ニ三有之輪廻^ヲ、面達^ス七宝之台^ニ。其探^レ密也。則廢^ス三乘之保証^ヲ、以歸^ス一実之果^ニ。何者、若得^レ開三顕一出世ノ本懷^ヲ、焉執^ス五時八教之理之權説^ヲ。（『恵心僧都全集』一・三八二頁）

『阿弥陀経』は「顕」意としては輪廻を離れて七宝の有相浄土へ往生することを説くが、「密」意としては、『法華経』と同じく一乗の教を説くという。また村上氏は、『阿弥陀経略記』においては「観解」や「深観」の語句は、空・仮・中の三諦もしくは法身・般若・解脱の三徳に言及する際に使用されると指摘している。

20 末木論文参照。

21 『恵心僧都全集』に収録される資料の内、『観心略要集』第二（『恵心僧都全集』一・二七七頁）、『自行念仏問答』（『同』一・五五五頁）、『決定往生縁起』（『同』一・五八一頁）、『阿弥陀観心集』（『同』三・五七六頁）には「仏」に対する言及がなく、『正修観記』（『同』一・五一七頁）、『妙行心要集』（『同』二・三三五～六頁）には言及が見られる。

22 『浄全』一・五四頁。

- 23 『惠心僧都全集』一・四一―三頁。
- 24 『大正藏』七・九五九頁c。
- 25 『淨全』一・五三頁。
- 26 『惠心僧都全集』一・四一五頁。
- 27 『惠心僧都全集』一・四一三頁。
- 28 『黒谷上人語燈録写本集成』一・二一七頁。
- 29 『黒谷上人語燈録写本集成』一・二一七―八頁。
- 30 この点については、前述のように曾根論文(二〇一七)において既に指摘されている。
- 31 『逆修説法』三七日の光明の説明には、次のように説かれている。
 諸仏ノ功德ハ、何ノ功德モ皆雖レ遍ニ法界ニ、余ノ功德ハ、其ノ相無シニ顯タル事ニ。但シ有ニテ光明ニ、正ク顯テセルニ遍ニ法界ニ之相ヲ功德也。故ニ、諸ノ功德ノ中ニ、以テ光明ノ最モ勝タリト釈シ給フ也。(『黒谷上人語燈録写本集成』一・一八九頁)
- 32 また法然は、続く阿弥陀仏の「別徳」すなわち白毫についても、源信の『阿弥陀仏白毫觀』などに依拠して、「惣ノ六道四生一切ノ凡聖ハ、併ラ被レ、疑ニ弥陀如来ノ之毫光ノ所現歟ト者ナリ也(『黒谷上人語燈録写本集成』一・二二四頁)」と説いている。ただし、ここで法然は「所現かと疑わるる」と言葉を濁して断定せず、後に「是ハ天台宗ノ意ナリ(『黒谷上人語燈録写本集成』一・二二六頁)」とも述べている。阿弥陀仏が一切を現し出すという解釈は、極樂の依正莊嚴の全てが「願力所成」なのだ主張する、五七日の「仏徳讚歎」の説示に帰着するものと思われる。
- 33 『阿弥陀経略記』は「無縁の慈悲」や「六即の阿弥陀」について説明する中で『觀經』を引用していた。一方、法然は『逆修説法』六七日の経徳讚歎の説法において、次のように説いている。

今此ノ經ハ、往生淨土ノ教也。不レ明ニ即身頓悟ノ之旨ヲモ、不レ説ニ歷劫迂廻ノ之行ヲモ、説テテ娑婆ノ之外ニ有リ極樂ニ我身ノ之ニ外有_中スト阿弥陀上、而明_乙ス可_レ願_下厭_テ此ノ界ノ生_ニ彼ノ国_ニ得_中ント無生忍_上之旨_甲也。

（『黒谷上人語燈録写本集成』一・二七二～三頁）

『観経』は娑婆世界の外に極樂、自身の外に阿弥陀仏が存在することを説いている経だと、法然は主張している。『阿弥陀経略記』の「密意」と法然との間で、浄土三部経の理解が異なることが読み取れる。

34 『黒谷上人語燈録写本集成』一・二六四～五頁。

35 『黒谷上人語燈録写本集成』一・二六六～七頁。

36 この文は三七日の「経徳讚歎」において、『選択集』第三章の「勝劣」義の雛形である、「殊勝功德故」の説明をする際にも引用されている。

37 この点については、拙論〔二〇一四〕〔二〇一七〕において既に論じている。

38 例えば、一一五四年の忍空の著作である『勸心往生伝』（『浄全』一五・五三七頁上～下）や、法然も引用している真福寺藏偽撰戒珠集『往生浄土伝』巻中の第十観操伝（『真福寺善本叢刊』六・四九〇頁下～四九一頁上）は、「阿弥陀三諦」説に言及するが「仏」の一字には言及していない。なお、法然の名号解釈である「万徳所帰論」と源信の「阿弥陀三諦説」との関連性については、香月論文や安孫子論文において指摘されている。

キーワード 法然、阿弥陀仏、逆修説法、阿弥陀経略記、源信

（さいとう むこう 東海学園大学 人文学部・共生文化研究所 准教授）